

学位請求論文審査報告要旨

2017年11月8日

申請者 永谷 直子
論文題目 現代日本語における形容詞の連用用法
—外面性／内面性に着目して—

論文審査委員 庵 功雄
山崎 誠
井本 亮

1. 本論文の内容と構成

本論文は、現代日本語の形容詞の連用用法について、形容詞のタイプとの関連から、多面的かつ丹念に記述したものである。

本書の構成は次の通りである。

序章 はじめに

1. 本研究の問題意識
2. 本研究の構成

第1部

第1章 日本語の形容詞と用法

1. はじめに
2. 日本語の形容詞の位置づけ
3. 形容詞の用法

第2章 形容詞の分類をめぐって

1. はじめに
2. 「感情形容詞」と「属性形容詞」
3. その他の分類
4. 本研究の立場と分析

第3章 形容詞の格をめぐって

1. はじめに
2. 形容詞の格に着目した分類
3. 形容詞文と主題と述部
4. 第3章のまとめ

第4章 形容詞の連用用法をめぐって

1. はじめに
2. 先行研究における「修飾語」の扱い
3. 連用修飾語の分類
4. 本研究の立場と分析の観点

第2部

第5章 考察の枠組み

1. はじめに
2. 「観察可能性」による分類から
3. 「説明対象」による分類から—「内面的用法」の下位分類
4. 第5章のまとめ

第6章 外面的用法と形容詞のタイプ

1. 問題の整理
2. 外面的用法と形容詞のタイプ
3. 第6章のまとめ

第7章 内面的用法における形容詞のタイプ(1) 形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞ではない場合

1. 問題の整理
2. 動作主認識の副詞的成分と形容詞のタイプ
3. 3種の形容詞の連用用法におけるふるまい
4. 動作主認識の副詞的成分の諸問題
5. 第7章のまとめ

第8章 内面的用法における形容詞のタイプ(2) 形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞である場合

1. 問題の整理
2. 「思う」を述語とする文における形容詞のタイプ
3. その他の認識動詞における形容詞連用形のふるまい—「考える」「感じる」
4. 第8章のまとめ

第9章 内面的用法における形容詞のタイプ(3) 動きの様子を表す場合

1. 問題の整理
2. 動きの様子を表す場合の形容詞のタイプ
3. 第9章のまとめ

第10章 その他の問題—「うれしい」と「楽しい」を例に

1. 問題の整理
2. なぜ「メジロがうれしく冴えづっている」が不自然なのか
3. なぜ「うれしく遊びませんか」は不自然なのか
4. その他の形容詞と持続性
5. 第10章のまとめ

第11章 連用用法における形容詞のタイプのまとめ

1. 連用用法に関わる要素(1)—形容詞が表す判断の志向性
2. 連用用法に関わる要素(2)—形容詞が表す判断の基準
3. 連用用法に関わる要素のまとめ—形容詞と動詞とのインターアクション

第3部

第12章 残された課題(1)属性叙述文における構文の選択—「Aさんはピアノを上手に弾きます」をめぐって

1. 問題の整理
2. 「上手さ」を表す文とは
3. A型で述べる「上手さ」とは
4. V型で述べる「上手さ」とは
5. アンケート調査にみるA型・V型の選択と事柄の具体性
6. まとめ

第13章 残された課題(2)言語間における構文の選択の差異—「(髪を)よく切ったね」をめぐって

1. 問題の整理
2. 考察の対象
3. 「よく」と「cal」が共起する動詞の違い
4. 日本語・韓国語の「出来ばえの述べ方」における違い
5. おわりに

終章 まとめと今後の課題

1. 本研究における2つの視点
2. 形容詞の連用用法の分類
3. 連用用法の成り立ちやすさに関わる形容詞のタイプ
4. 先行研究における形容詞の分類と本研究における形容詞のタイプ分けの対応
5. まとめと今後の課題

参考文献

2. 本論文の概要

本論文は3部15章(序章と終章は部に属さないのので、部に属するのは13章)からなる。

序章では、永谷氏が韓国で日本語を教えていた際の韓国人日本語学習者の誤用例(「?おもしろく遊びました」)が取り上げられ、一見、単なる副詞的連用修飾であり、適格文になってよいはずのこの文が(韓国語では適格であるにもかかわらず)日本語では成り立たないのはなぜか、という問題意識から本研究が発端していることが述べられる。合わせて、本論文全体の構成についても紹介される。

第1章～第4章は第1部を構成する。

第1章では、日本語の形容詞の位置づけおよび用法が論じられる。

形容詞の位置づけについては、時間的限定性、叙述の種類、意味における相対性といった観点を取り上げられる。一方、用法に関しては、終止、連体、連用という3つの用法があり、そのうち、本論文では連用用法が中心的に扱われることが述べられる。また、本論文では、形容詞連用形を「副詞」とは見ないこと、形容詞連用形が必須成分であるときも副次的成分であるときも考察対象とすることが述べられる。

第2章では、形容詞の分類が論じられる。

形容詞の分類としては、感情形容詞と属性形容詞が有名であるが、本章では、両者に分ける基準(内的か外的か、主観的か客観的かなど)が検討される。その一方、両者は離散的に別れるものではないとする立場からの先行研究も検討される。以上を検討した上で、本論文では、「内的な様子を表すか外的な様子を表すか」「事態の把握の仕方が思念的で

あるか直感的であるか」「判断の過程に基準が必要であるか」の3点を軸に検討していくことが述べられる。

第3章では、形容詞が取る格についての検討が行われる。

形容詞が取る格は、ガ格とニ格であり、形容詞のタイプは、両者が言語化されるか、必須であるかによって決まってくるという本論文の立場が紹介される。

第4章では、形容詞の連用用法が論じられる。

連用修飾語／成分に関する詳細な検討を行った上で、本論文の立場として、形容詞連用形の用法を「外面的用法」と「内面的用法」に大別し、それぞれを「主語または対象の様子を表す」か「動きの様子」を表すかで二分し、前者については「主語の様子を表す」か「対象の様子を表す」かに分けることが述べられる。

第5章～第11章は第2部を構成する。

第5章では、考察の枠組みが述べられる。

まず、「外面的用法」か「内面的用法」かについて言えば、本論文の主な研究対象は「内面的用法」であることが述べられる。次に、「内面的用法」で用いられる形容詞に次の3つのタイプがあることが示される。すなわち、「読む」のような認識動詞以外を述語とする文で使えるか、「思う」のような認識動詞を述語とする文で使えるかという観点である。

- ・ONを興味深く読む／ONを興味深く思う
- ・*Nを素晴らしく読む／ONを興味深く思う
- ・*Nを大きく読む／*Nを大きく思う

第6章では、外面的用法と形容詞のタイプの関連性が述べられる。

ここでは、統語的テスト①として、「名詞句を主題として、超時的<叙述>文をつくることが可能か」が取り上げられる。外面的用法を持ちうるのは、このテストが可である形容詞に限られる。

第7章では、内面的用法のうち、「形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞ではない場合」が考察される。例えば、「報告書を面白く読んだ」のようなタイプが考察対象となる。

このタイプは先行研究で、「動作主認識の副詞的成分」と呼ばれることもあるが、これまでは、この用法の成立の可否が形容詞のタイプと結びつけて論じられることはなかった。

それに対し、本章では、統語的テスト②「「私は～い。」の形で、対象格を必須とせずに、「わたし」の心の様子を表すことが可能か」、および、テスト③「「私は～が～てたまらない」の形で、「わたし」の心の様子を表すことが可能か」を用いて形容詞を3分し、「動作主認識の副詞的成分」として動作主の認識を表せるのは、テスト②③が可である「寂しい」タイプの形容詞（寂しい、悲しい、うれしいなど）、および、動詞が「取り入れに関わる動詞」（読む、飲む、食べるなど）の場合に限り、テスト②が不可、テスト③が可である「おもしろい」タイプの形容詞（おもしろい、興味深い、おいしいなど）でもこのタイプが表せることが述べられる。

第8章では、内面的用法のうち、「形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞である場合」が取り上げられる。「あの学校を素晴らしく思う」のようなタイプが考察対象となる。

この用法が成り立つか否かについて、統語的テスト④「これは彼には（形容詞）」の「彼には」が必須であるか、テスト⑤「これは彼には（形容詞）」が成り立ち、その解釈として「これは彼に適切なものより（形容詞）」が成り立つか、テスト⑥「これは彼には（形容詞）」が成り立ち、その解釈として「これは彼に適切なものより（形容詞）」が成り立つか」という3つの統語的テストが用いられる。その上で、本章で取り上げている認識動詞を述語とする用法が成り立つのは、テスト④～⑥が全て不可である「素晴らしい」タイプ、テスト④⑤は不可で⑥は可である「重要だ」タイプに限られることが、アンケート結果とともに示される。

第9章では、内面的用法のうち、「動きの様子を表す場合」が取り上げられ、このタイプが成り立つのは、統語的テスト⑤⑥をともに満たす「大きい」タイプの形容詞（大きい、明るい、広いなど）に限られることが述べられる。

第10章では、これまでの考察で同じ類に分類される形容詞の間における許容度の差が論じられる。その例として、テスト①②から同じタイプ（「寂しい」タイプ）に分類される「うれしい」と「楽しい」の間に見られる非対称性（「鳥が {うれしく/??楽しく} さえずっている」）が考察される。

本章の結論として、形容詞の表す心理状態の持続性は形容詞によって異なること、および、内面的用法の成り立ちやすさには形容詞の表す心理状態の持続性が関与していることが述べられる。

第11章では、連用用法における形容詞のタイプのまとめが行われる。

第2部全体の結論として、判断の主体をガ格（主格）にとり得る形容詞は、連用用法においても、動作主の心の様子を表し、判断の対象をガ格（主格）にとり得る形容詞は、連用用法においても動作主の心の様子以外を表すことになること、および、その中間ともいえる、判断の主体を主格に判断の対象を対象格にとる形容詞は、連用用法において動作主の心の様子を表す場合、述語は「取り入れに関わる動き」である必要があることが述べられる。そして、その理由は、形容詞の側から見れば、これらの形容詞が判断の主体と判断の対象の2つの項を求めるからであり、動詞の側から見れば、「取り入れに関わる動き」が動作主と刺激源の2つの項を求めるからであること、つまり、連用用法の成り立ちやすさは形容詞の格構造と動詞の格構造との相互作用によって決まることが述べられる。

第12章と第13章は第3部を構成し、残された問題として、2つのケーススタディが紹介される。

第12章では、属性叙述文における構文の選択の問題として、「上手さ」を表す文について論じられる。例えば、「田中さんは絵が上手です」と「田中さんは絵を上手に描きま

す」のような例の対比が考察対象となる。

この場合、一定の条件が満たされれば、形容詞による表現（A型）は可能になるが、動詞による表現（V型）が自然になるのは、述部の具体性が高い場合に限られることが、アンケート調査の結果も踏まえて指摘される。例えば、上記の例ではA型が好まれるのに対し、「リスはクルミを前歯で割って食べるのが上手です」のような場合は、「リスはクルミを前歯で上手に割って食べます」のようなV型の方が許容度が高くなる。

第13章では、日本語と韓国語の比較として、「よく」が取り上げられる。

例えば、韓国語を母語とする日本語学習者には「*Aさんはピアノをよく弾く（ピアノを弾くのが上手だ、の意味で）」といった誤用が多く見られるが、その背景には、日本語の「よく」と韓国語の「cal」の「ズレ」が存在することが指摘される。そして、そのことが出来ばえのよさを述べる際に、日本語では客体の状態について、韓国語では動きについて述べるという違いに関わることに繋がっていることが指摘される。

終章では、本論文全体のまとめと今後の課題が述べられる。

3. 本論文の成果と問題点

本研究の成果は次の通りである。

第一に、これまで「副詞」を中心に議論されてきた「連用修飾成分」の議論に対して、「形容詞連用形」を中心的な論点として取り上げ、新たな言語事実を掘り起こしつつ、周到な議論を展開したことが挙げられる。

日本語の形容詞は、活用を持つことからわかるように、それ自体陳述性（三上章の用語で言えば「陳述度」）を持つ。特に、連用形にも一定の陳述度が認められることが、類型論的に見た場合の日本語の形容詞の特徴であると言える。本論文で扱われている「論文を面白く読んだ」のようなタイプの表現は、英語の SVOC 文型、生成文法で言う小節 (small clause) などとの関連も想起させるものである。その一方で、形容詞の連用形は副詞的に機能することも多く (ex. 車を速く走らせる)、これまでは専らこうした副詞的な用法（この場合は陳述性を持たない）のみが論じられてきたと言える。

これに対し、本論文は、これまで散発的な指摘に留まっていた形容詞連用形の陳述的用法について、形容詞のタイプとの関連から、用法の成否を綿密に記述し、その成否をかなりの程度まで形容詞のタイプから予測可能な形で記述することに成功している。

第二に、先行研究を渉猟し、本研究を研究史上に適切に位置づけていることが挙げられる。また、論文全体のかなりの部分が、学会誌論文をはじめとする既発表の論文から構成されているにもかかわらず、論文全体が緻密に再構成されており、この点からも、永谷氏の研究能力の高さがうかがえる。第一点と合わせて、本論文が今後、形容詞や連用修飾について論じる際の必読文献となることは疑い得ない。

第三に、本研究が、永谷氏が韓国語話者に日本語を教えていた際の学習者の誤用例（「?私はそこでおもしろく遊びました」）から出発しているという点が挙げられる。この例は、韓国語では成り立つものであり、ここに両言語の「ズレ」が存在するわけだが、こうした日本語教師としての気づきから研究を組み立てるとするのは、寺村秀夫氏以来の日本語学（日本語文法研究）建学の精神にも、近年の日本語教育文法の理念にもかなうものであると言える。第二点と合わせて、本論文は、日本語文法研究の分野における課程博士論文の手本となり得るものであると言える。

こうした成果を挙げている本論文であるが、問題点も存在する。

第一に、議論が極めて緻密であることにともない、読者としては、論文全体を頭に入れて理解するのにやや骨が折れるということがある。できれば、第 11 章で挙げられているようなまとめを、ホームページの「サイトマップ」のような形で、形容詞の分類について行う前の部分にも置くといった配慮があれば、全体の議論の構成や各種の統語的テストが持つ意味がより読者にとってわかりやすくなったのではないかと思われる。

第二に、統語的なテストを積み重ねて行く手法の手堅さの一方で、外形的条件の分析からの先の見通し、文法論的な考察についてはやや物足りない印象も残った。形容詞の格構造の観点が用法記述に有効なことはよくわかるが、「形容詞の指向性が形容詞の持つ格構造によって決まる（第7章 p. 117）」という記述からは、では、形容詞という語彙が判断を表すということはどういうことなのかというような原論的な疑問を持たざるを得ない。表現の問題と言えばそれまでだが、外形性の分析に立脚するあまりにそちらへの省察がやや手薄な印象を受けた。原理的な論点を掘り下げる上で学位請求論文はよい機会だったと思われるだけに、また、記述的分析が優れているだけに、惜しまれるところである。

第三に、本論文で掘り起こされたいくつかの事実に関し、そうした言語事実が存在する理由の説明についての考察があってもよかったのではないかと思われる。例えば、日本語では形容詞が活用する一方、形容詞の連用形と副詞形が多くの場合同形になるのに対し、英語では形容詞は活用しない一方、副詞形は多くの場合、形容詞とは異なる形（派生形）をとる、といった類型論的な差異が、本論文で扱われた現象にとってどのように関わるのかといったことについて、少しでも踏み込んだ議論があればよかったように感じられる。

こうした問題点は存在するものの、これらは本論文全体が挙げた成果に比べれば大きな瑕疵とは言えない。また、永谷氏自身もこれらの問題点に気づいており、今後の研究において、上記の問題点も確実に改善されると考えられる。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、永谷直子氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 庵 功雄
山崎 誠
井本 亮

2017年10月13日、学位請求論文提出者、永谷直子氏の論文「現代日本語における形容詞の連用用法―外面性／内面性に着目して―」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、永谷氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、永谷直子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。